

成で終わる。その過程は、中間目標やより長期の目標をたてられるように非常によく分配される。

コミュニケーション

対処プランは、コムーネの施設や公的、民間の協力パートナーに、そして特にユーザーに広く伝達されなければならない。目標や、中間目標を達成するために考えられた方策は公開され、率直であることが重要である。分けられたプロジェクトを実行し、評価することができる。「一度とめて、集まって話す」という形をとることができる。一年または半年ごとにユーザーや職員、政治家との会議や集会をもつことは、期待や可能性を実行し、調整する機会を与え、プロジェクトグループの外部から今後の過程に関するアイデアを与えることができる。

これに加え対処プランや目標、プロジェクトの進行状況に関しては、より広く情報が与えられなければならない。それぞれのコムーネにある他とのコネクションに使用される、例えばローカルの報道機関といったチャンネルを使用することができる。

高くなるのか？

しばしば人は、経済的な結果に対する恐れによってそれぞれのイニシアチブを最初に妨害してしまう。また、経済はもちろん現実のどんな野心のレベルにおいても役割を果たす。全てのイニシアチブを一度に、または二度にわたって実行することはできない。コムーネレベルにおいて国連の標準規則を取り込み、そして実行することは時間のかかる過程である。もし、その目的を考えるのみ、またはその目的に対して目をふさぐのであれば、多大なコストをかけることなくその道に沿って大きく進むことができる。多くのイニシアチブは、アクティブやプロジェクトを計画するときにはすでに障害を見込み、含むことに関する。それはしばしば、後で修正するより非常に安い。

一歩先を行く

パイオニアである Kolding コムーネ

Kolding コムーネは 1996 年以來、全ての新しいイニシアチブに関して、22 の標準規則を取り入れるという原則で国連の標準規則の実行に取り組んできた。私達は Kolding コムーネを訪ね、Kolding コムーネではどのようにその過程を始め、国連の標準規則に取り組んでどのような結果が出たかについて、技術部長の Hans-Joergen Boegesoe、学校部長の Ib Hansen、社会部長の Lars Rasmussen にインタビューした。

「国連の標準規則に対する取り組みにおいて、Kolding コムーネでは今のような状態をスターティングポイントとした」と Kolding の社会部長である Lars Rasmussen は言う。「それは将

来のこと、そして全体を考えることである。その 22 の標準規則によって、私達は必然的にあらゆるところを回り、アクセシビリティの考えを全ての分野に入れていく。それは、物理的なアクセシビリティや情報または教育に対するアクセシビリティであろうとなかろうとあてはまる。実践自体がその考え方を私たちの職員の日常生活に根付かせ、統合させる。それは時間がかかるため、国連の標準規則の取り組みもまた長くてつらい道のりであるが、その間結果が表れ、次第に様々な分野において取り組むことができる可能性が得られる。」

「今現在私達は学校の分野において、私達の学校を障害を持つ子供達がアクセスしやすいようにするために堅実な取り組みを行っている。」と学校部長である Ib Hansen は言う。「取り組みは、アクセシビリティセンターが作成した身体障害者、視覚障害者、アレルギー患者に対する Kolding コムーネの学校のアクセシビリティの状態を基に、そのアクセシビリティの問題を系統的に位置付けた後に行われる。次の大きな取り組みの分野は、飛び越えなければならない障害物や階段があるために障害を持つ人々にとって大きなバリアとなる、街中の歩道や道路にある建物をリニューアルすることである。」

独立した経済はない

国連の標準規則の取り組みは、後に変える必要がなく、事が最初から正しくあるようにと新しいイニシアチブにおいては障害を見込むことに 3 人の部長は賛成している。「私達は、標準規則の取り組みのために特別にプールされたお金を捨てたくないが、例えば建物を新しくする時は、建築物は全ての人々にとってアクセスしやすいものでなければならないという原則により実行する。」と技術部長である Hans-Joergen Boegesoe は言う。「アドバイザー援助に使用する費用はプロジェクトのコストに入らないので、余分なお金はかからない。一方標準規則の取り組みは、後に建てかえなくてもよいようにアクセシビリティを最初から考慮する。というわけで最初は高くなる。」

「しかし、標準規則の取り組みはもちろん無料でできることではない。そして時間がかかるため、職員の給料がかかる。しかし独立した経済はないし、またそれは間違っているだろう。」と Hans-Joergen Boegesoe は言う。「私達が前もってする取り組みにおいて、環境やその他関連するものを取り入れるように、標準規則を取り入れる。」

政治的野心や個人的雇用

Kolding コムーネにおける標準規則の実行は、障害者団体の深い協力のもと行われた。Lars Rasmussen によると、障害者団体は常に過程の一部感じており、彼らは過去の過ちを避けるという現実的な見解から取り組みに参加した。障害者団体との協力は新しいことではない。過去にさかのぼり 1980 年代には、技術部門はコムーネの建築物に対する出入り状況の改善を提案していた障害者グループと協力体制をとっていた。

「国連が 1993 年に標準規則を承認した時、そのことは障害者団体との協力をコムーネの全ての団体に拡げる、歓迎するべき機会である。」と Hans-Joergen Boegesoe は話す。二つの行政機関が話し合うことにより、国連の標準規則を取り組むことがマネージャーに提案される方向へと導かれていく。マネージャーからの推薦により、経済委員会は機関車を走らせることを決定する。

「しかしまた Kolding コムーネの政治に関しては、一般的に高い野心のレベルであり、障害に対する態度は重要であると示している。職員はそれを深く真剣にとらえており、具体的なイニシアチブをもって取り組む人々は個人的に雇用され、その過程を前へと進めてきた。」と Ib Hansen は話す。

プロジェクトのマネージメントとユーザーとの関わり合い

一つは標準規則を実行する決定を下すことであり、また一つは実践的な取り組みを始めることである。Kolding コムーネでは、他のプロジェクトで使われている組織の形をコピーした。技術部門、学校・体育部門、社会・保健部門の部長達はそのプロジェクトの運営グループをつくる。運営グループは、職員をパラレルグループに指名した。彼らの仕事は、その実行を確実なものにする対処プランを作成することである。対処プランは、ユーザーと関わり合うという原則と取り組みは将来を見据えるべきであるという望みの上に立つ。

運営・パラレルグループを確立した後は、様々な分野においてコムーネと一緒に取り組むワーキンググループがつけられた。教育の分野、物理的なアクセシビリティ、文化/体育、雇用/家族生活について取り組むグループが確立された。最初、グループは関連する行政機関の代表者で成り立っていた。彼らの仕事は、彼らの分野におけるステータスを確立することであった。つまりそれぞれの分野において、Kolding コムーネが障害を持つ人々に対してどのようなイニシアチブを持っていたのかを明らかにすることである。それに応じて障害者団体が大きな会合に呼ばれ、ワーキンググループに参加すべきユーザー側からの代表者が選ばれた。ワーキンググループはそれ以来、行政機関と障害者団体両方の代表者で成り立つことになった。彼らの仕事は、それぞれの分野において更なる取り組みを進めるには何が必要かを見つけることである。さらに、コムーネにおける出入りの状況に関する問題を書き出すために、障害を持つ人々に対する質問調査票を作成した。その調査は、アクセシビリティのワーキンググループが持つイニシアチブのいくつかのスターティングポイントをつくった。

「障害者団体はもちろん要求する—それが彼らの仕事である」と Lars Rasmussen は言う。「しかし私達の経験では、その要求が協力に関するフォーラムで出された時、障害者団体がコムーネの計画作成に参加する可能性は非常に高くなる。コムーネ側の優先事項は、障害者団体側が重要だと考える課題を把握するためにも、障害者団体との話し合いの後に決

まる。私達は義務付けられた障害者団体との協力を継続して行うことを大いに優先し、障害者団体は、何が経済的に可能かという現実的な状況を踏まえて取り組みに参加する。」

障害者委員会

1998年、Kolding コムーネはワーキンググループが作成した、彼らに関わる全ての事柄に属する資料が提出される障害者委員会を成立させた。「私達は、障害者委員会に問題を提出し、彼らは発言する機会を得、そしてそのような形で彼らは影響を与えていく。」と Ib Hansen は話す。「私達は障害者委員会を成立させた理由は、新しい社会福祉法において、高齢者委員会と不服申し立て委員会を成立させることを法律で義務付けているからである。以前、障害を持つ人々が代表である社会的な消費者委員会があった。しかし現在、それは高齢者委員会と障害者委員会に置き換えられている。障害者委員会は、9人の様々な障害者団体の代表から成っている。彼らは身体的障害、精神的障害、聴覚障害、視覚障害を持つ人々の代表である。」

「今日私達は、ユーザーがワーキンググループと障害者委員会両方の代表であるという状況にいる。次に私達は、障害者委員会が国連の標準規則の取り組みにおいて中心的役割を担うという新しいモデルを見つけなければならない。そういうわけで問題となってくることは、ワーキンググループが引き続き障害者団体から代表者を得るかどうかである。—これに関しては、まだ答えが出ていない。」

一人一人と真剣に接する

「ユーザーとの協力は、一人一人と真剣に接するということである。」と Ib Hansen は言う。「障害を持つ子供の両親が私達とコンタクトを取る時、彼らはもちろん、特別学校を選ぶに際して、どんな長所と短所があるのかという重要な情報を得なければならない。今、マルチハンディキャップの子供達のための水泳施設がある学校が2つある。障害を持つ子供の両親は、例え彼らが他の学校区域に属していて、自由に学校を選択できても、私達はすぐに全ての学校に同じような施設をつくることができないということを理解している。全てのお金をそれに使用するべきなのだが。」

ユーザーと関わり合うということはまた、障害を持ったユーザーのために情報をのせた資料を作ることである。Lars Rasmussen によると、障害をもつ人々向けの雇用に関するパンフレットを作成した。「私達は、何人かのユーザーにその資料が分かりやすいかどうかの意見を聞くために、それに目を通してもらった。それにより、私達はそれがアクセスしやすい情報だと信じていたが、常にそうとは限らないということを学んだ。私達はユーザーのアドバイスにより、様々な障害者グループにどのように情報を提供していけばいいのかについて知識を得た。」

組織との協力

Hans-Joergen Boegesoeによると、国連の標準規則の実行はまた、組織との更なる協力を意味している。「しばしば彼らは個人的または組織の取り組みにおいて、私達が始めるイニシアチブと関わっている。」と Hans-Joergen Boegesoe は言う。「例えば、私達は Kolding 商業委員会と協力している。私達は歩行者道路に関してイニシアチブをとり、その道路にある全ての店の商品を系統立てた。店の商品が歩行者道路のあちこちに置いてあることは、多くの障害を持つ人々、つまり身体障害や視覚障害を持つ人々にとって大きな問題であった。そこで私達は、店が物を置いてもよい所をブロンズの釘で塗装し、印付けた。もし、その枠が守られれば、その歩行者道路を通して歩道が確実にあることになる。しかしユーザーから、店が常にその枠を守っていないという批判が出ている。商業委員会はメンバーに対し、規則を守るよう話をしなければならぬ。私達は、物事がうまく運ぶための「ちょっとしたやさしさ」を試みている。人が歩くことができるように街を組織することは、大きな前進である。それは同時に、歩行者道路が乳母車を押す人々にとってもアクセスしやすいものとなる。

アクセシビリティと美学

「物事を障害を持つ人々がアクセスしやすいようにすれば、それはつまり全ての人々にとって快適なものとなる。」と Hans-Joergen Boegesoe は言う。「その考えであれば、私達は障害を持つ人々だけのアクセシビリティではなく、全ての人々のアクセシビリティを考える。」私達はまた、物事がただアクセスしやすく、機能的であるだけでなく、審美的な次元をもつようデザインされることに大いに取り組む。それは例えば、視覚障害や弱視の人々のための指示線があるベンチやトイレ、規則的に光る歩行者交差点である。」

「指示線に関する取り組みにおいて、私達は視覚障害や身体障害を持つ人々はそれぞれ異なる関心をもつことを経験した。」と Hans-Joergen Boegesoe は話す。

「歩道に高さを出して指示線をつくと、それは車椅子使用者や歩行困難の人々にとってはバリアとなる。そのようなケースにおいて、障害を持つ人々の異なった関心の共通項を見つけることが、そして確実に審美的な次元を兼ね合わせる事が私達の仕事である。人々がその問題を意識した時、それが可能となる。」

全てを一つのかさの下に

「国連の標準規則の取り組みはまた、私達がすでに障害の分野で実行していることを目に見える形にしたことを意味している。」と Ib Hansen は言う。「学校の分野において、私達はフォルケスコーレに障害を持つ子供達がどれだけいるのか、そしてどのように運営されているのか調査をした。私達は常に、障害を持つ子ども達をフォルケスコーレに統合しようと取り組んでいる。この分野においては、国連がこの規則を承認したからといって最初から始める必要はない。」

「私達は以前、障害者政策と何らかの関係があるプロジェクトを運営した。以前の技術部門と障害者団体の協力体制は、物理的アクセシビリティのワーキンググループと障害者委員会の協力体制に置き換えられた。私達の指示線に関するプロジェクトは現在、国連の標準規則の取り組み下に属している。このように、私達が常に取り組んでいる事柄を同じかさの下に集めている。」

将来は姿勢の教化を

今後 Kolding コムーネにおいては、学校や街中、そして交通システムに対する物理的アクセシビリティを進める取り組みがなされるであろう。「私達は、物理的アクセシビリティを踏まえたその取り組みを必ず管理できると信じている。」と Ib Hansen は言う。「その他の取り組むべき分野として、姿勢の教化である。私達は、歩くこと、または聞くこと、見るができない人々については何度も話をしてきた。しかし、心に障害がある人々に関してはどうか？私達は彼らに対しても寛容であるか？私達は、視覚障害を持つ人々を受け入れることはできるが、精神障害を持つ人々はどうか？私達は彼らを学校、または職場に統合することができるか？私たちが取り組まなければならないのがこの分野である。

Kolding コムーネにおいて、標準規則の取り組みに関して具体的な結果を見るまでには時間がかかることを学んだ。プロジェクトは、人が思うように常に早く進むとは限らない。しかし Kolding コムーネにとって国連の標準規則の取り組みは、止まるまたは終わることのない過程である。実行される全ての新しいイニシアティブが標準規則、そしてアクセシビリティに根付くであろう。その3人の行政機関の部長いわく、それが全ての実践である。

道具箱

障害を持つ人々に平等の機会を与えることに関する国連の標準規則は、全部で22の規則から成り立っており、それらは3つの主要パートに分かれる。最初の4つの規則は、障害を持つ人々ができるだけ広範囲にわたって障害を持たない人々と対等に生きることができるよう要求する根本的な条件に関する。次の8つの規則は、障害を持つ人々の社会参加に対し特に意味をもつ取り組みの分野に関する。また最後10個の規則は、障害を持つ人々に平等の機会を与えるという目標の、主に中央のレベルにおける実践に関する。今から行う説明においては、特にコムーネやアムトのレベルに関連する1から12の規則に限る。同時に規則の概要は50ページ(注意:本文ではページ数が異なる)で見ることができる。

平成14年度厚生科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究事業）

障害者の社会的理解の促進及び自己決定の支援、
自己選択の支援等の権利擁護に関する研究
報告書

平成15年3月発行

編集・発行 大熊 由紀子（主任研究者）

〒154-0002 世田谷区下馬6-45-9

ファックス 03-3410-7589

Eメール dzy00573@nifty.com

HP : <http://www.yuki-enishi.com/>

印刷：阪東印刷紙器工業